

目的 今日单身赴任は、ごく日常的な言葉となっているが、この生活形態が正常なものでないことは言うまでもない。しかし、この特異な生活形態において少しでも快適に過ごすため、住居学の視点より、まず住居内機器および家事作業等の調査を行う。これらの調査結果をもとに、今後の单身赴任者の住居に常備すべき機器およびその有効な使用法等の指針を得ようとするものである。

方法 調査時期は1990年9月～11月であり、対象者は広島県内に支店を持つ企業の社員とし、ランダムに選んだうちの十数社に（アンケート）調査依頼した。有効回答数108件であり、年齢構成は30歳代17人、40歳代65人、50歳代26人である。また職階構成については管理職79人、その他29人である。

結果 1) 单身赴任者は40歳代と50歳代をあわせて約84%となり、初めての单身生活の場合不都合なことが多い。2) 会社の準備している寮・社宅などが約62%であるのに対し民間アパート・マンション利用は約38%である。3) 留守宅との連絡手段である電話の保有率は直通および内線電話を合わせ61%ある。4) 暖房設備の保有率は約82%である。5) 娯楽・情報源としてのテレビの保有率は約93%できわめて高く、次いでラジオカセットの50%である。6) テレビの保有率は30歳・40歳・50歳代の順に増加している。7) 家庭電化製品を保有率の高い順に示すと、冷蔵庫61%、電気ポット39%、炊飯器36%、電子レンジ33%、トースター30%等となっている。8) 家事作業として不可欠な洗濯は約90%の人が自分自身で行っている。